

[研究論文]

幸田延のヨーロッパ音楽事情視察

Nobu Koda's Investigation into the State of Affairs of Music in Europe

平高典子

Noriko Hirataka

〈抄 録〉

幸田延は、1909年11月から1910年7月の間、東京音楽学校を休職してヨーロッパに滞在し、主にドイツのベルリンとオーストリアのウィーンで、また帰路フランスのパリとイギリスのロンドンで、音楽事情を視察した。その間したためられた日記から、演奏会鑑賞、音楽学校及び学校の音楽授業の参観、レッスン受講、音楽関係者との交流など、多彩な活動の内容が明らかになった。

日記における音楽関係の記述からは、彼女が、深い音楽性・的確な批判能力・過去や同時代音楽に対する豊富な知識と洞察力を持っていたことがうかがえる。これらの能力は、滞在によってより強まったであろう。また、当時彼女が置かれていた音楽界では、女性音楽家のネットワークというべきものが機能しており、そのネットワークと関わる音楽家たちと交流していたことも判明した。

帰国後延が東京音楽学校に復帰することはなく、ヨーロッパの音楽や音楽教育をライブで体験して得た知識や批評能力が十全に生かされたわけではなかったといえよう。

キーワード：幸田延、ヨーロッパ音楽事情、女性ネットワーク

Abstract

From November 1909 to July 1910, Nobu Koda took a leave of absence from work at Tokyo Music School and stayed in Europe for her musical carrier. She mainly studied the musical circumstances in Berlin, Germany and Wien, Austria during her stay and in Paris, France and London, England on her way back. Wide varieties of activities she had done such as attending concerts, visiting music schools and classes, attending lessons, and interacting with the music community were revealed from the diary she wrote during her stay.

From what she wrote about music in the diary, it is clear that she had profound musical ability, sound criticism, abundant knowledge and understanding toward the past and contemporary music of that time. Those abilities might have been reinforced during her stay in Europe. Moreover, it was found that in the musical society she was in at that time, there was a kind of special network functioning among female musicians that enabled a wide variety of interaction among those at that time, and she was in that community.

After Nobu Koda returned to Japan, she could not belong to the Tokyo Music School and her knowledge and ability to criticize had not been sufficiently utilized.

Keywords: Koda Nobu, musical circumstances in Europe, network among female musicians

はじめに

幸田延（1870–1946、以下幸田と記す）は、1909（明治42）年から1910（明治43）年の間、ヨーロッパに滞在し、ベルリン、ウィーンを中心に音楽事情を視察した。その間記した日記が、遺族の幸田成貴氏の元に残っている。日記によると、この滞在中、幸田は多くの音楽会を鑑賞し、多くの音楽家と交流し、多くの音楽学校や学校の音楽の授業を訪ねたことがわかる。

この日記は、2012年瀧井敬子と筆者によって翻刻され、現代語訳、注釈、解説などを付けて、『幸田延の『滞欧日記』』と題して出版された（瀧井敬子・平高典子 2012）。本稿では同書と同様に、この視察を、出発まで、1回目のベルリン期、ウィーン期、2回目のベルリン期、パリ期、ロンドン期、と、6期に分けた上で、日記の記述内容をいくつかの観点から分類・整理し、その後、特に、音楽体験や音楽評、女性ネットワークとの関わりについて論じることとする。

瀧井はすでに同書所収の「幸田延の『滞欧日記』を読むために」（瀧井 2012）で、幸田のヨーロッパ滞在の背景と、日記の内容について詳細に論じている。本稿では、瀧井論文の論考に依拠する場合には明記するが、扱う内容が重複する場合などについては、特に断らなかった。

1. 出発まで

文部省第1回音楽留学生として1889（明治22）年からアメリカ・ボストン及びオーストリア・ウィーンに留学した幸田は、1895（明治28）年、音楽界の大きな期待に迎えられつつ帰国した¹⁾。直ちに高等師範学校附属音楽学校（のちに東京音楽学校）²⁾の教授に任命され、教育者、演奏家としてはなばなく活躍したが、1905（明治40）年ごろから、以下に述べるように、東京音楽学校内や当時の新聞や文芸誌などのバッシングを受け、1909年休職に追い込まれた。

休職に至る理由を簡単にまとめると、一つは、女性教員の支配・外国人教員の横暴・風紀の乱れなどを挙げて、音楽学校そのものが堕落しているとみなし、その原因を幸田に求めるメディアの存在である。例えば1908年にいくつかの新聞に誹謗中傷記事が掲載されたが、「幸田延子女史は本校に少なからざる功労のある人で又芸術家として尊敬すべき天才を有している、しかし教育家としての品性人格は絶対に非認せざるを得ない、教育家養成主義たる本校に斯の如き人を置くのは害あつて益がなからう、女史が退けば本校否我音楽界が如何に発展するかは言を俟たずして明である」（『やまと新聞』明治41年9月、東京芸術大学百年史編集委員会 1987: 568）、「ああ尊きこの大芸術を婦女子の手にのみ委して、男子拱手傍観して沈黙すると云ふは由由しき国辱にあらずや」（『東京朝日新聞』明治41年9月、東京芸術大学百年史編集委員会 1987: 569）、「ユンケル氏に至っては高雅なる芸術に携われる人としも思えぬほど品性の下劣な人なり（中略）この人の幸田女史との関係云々または梅毒云々は別問題にしても（後略）」（『東京朝日新聞』明治41年9月、東京芸術大学百年史編集委員会 1987: 570）、などと散々である。1909年の『帝国文学』「不見識なる音楽家」の記事にも、「無責任」「情けない」「無能」（第15巻2号、明治42年2月、引用は東京芸術大学百年史編集委員会 1987: 572–574）などの厳しい表現が羅列されている。

もう一つは、東京音楽学校内の、重鎮である幸田に対する男性教員の反感や嫉妬である。1907年東京音楽学校長に就任した湯原元一（1863-1931）は、この感情を背景に、メディアの風潮に後押しを受け、策を練って、技術監の要職にあった幸田を休職に追い込んだ（瀧井 2012: 9-36）。

1909年9月休職を命じられた幸田は、同25日横浜港を出発し、11月3日ベルリンに到着した。日記はこの日より始まっている。皇室との関係が深く、女性皇族に音楽を教えていた幸田は、イギリス駐在中の伏見宮若宮博恭に合流する伏見宮若宮妃経子（博恭王妃、1902-1939）に付き添うため、同じ船にした可能性がある。

以後、日記の音楽関係の記事を中心に、ヨーロッパ滞在をまとめることとする。著名な作曲家は原則として原綴りを省いた。また生没年も一部を除いて省略した。

2. 1回目のベルリン期（1909年11月3日-1910年3月24日）

2.1 演奏会

ベルリンに到着した翌日から始まるのが、頻繁なコンサート鑑賞である。4か月強の間に62回、平均すると2・3日に一度演奏会を訪れている。日記では曲目などの内容をあまり詳しくは残していないが、批評を書きとめているときもある。一部を挙げる。

- ・オーケストラ：ベルリン・フィルハーモニー（指揮者はニキシュ Arthur Nikisch、モットル Felix Mottel）や、王立宮廷楽団（指揮者はシュトラウス）など
- ・室内楽：ツィンマー Zimmer 四重奏団、シェフチーク Ševčík 四重奏団、マルトー Marteau 四重奏団 Quartett、フィルハーモニー三重奏団など（総じて評価は非常に厳しい）
- ・ヴァイオリン：ヤン・クーベリック Jan Kubelik、フーベルマン Bronislaw Huberman、2回行ったイザイ Eugène Ysaÿe、ヴィエトロヴェツ Gabriele Wietrowetz、ブロイニング Gunna Breuning-Storm
- ・チェロ：バリヤンスキー Serge Barjansky
- ・ピアノ：コツァルスキー Raoul Koczalski、レヴィン Joseph Lhévinne、ダ・モッタ José Vianna da Motta、ステイーブ Olga Steeb、ザウアー Emil von Sauer、シュナーベル Arthur Schnabel（ボヘミア四重奏団と）、バーバー Felix Berber、ダックス Oskar Dachs
- ・声楽：メンゲヴァイン・オラトリオ協会 Mengewein'scher Oratorienverein（モーツァルト《レクイエム》）、ベルク Marie Berg、レーマン Lili Lehmann、シャリアピン Fyodor Chaliapin
- ・オルガン：シュミットハウエル Ludwig Schmidthauer
- ・作曲（現代曲）：レーガー自身も出演した「レーガーの夕べ」やシャルヴェンカ Xaver Scharwenka の自作の曲によるオーケストラ・コンサート（後者は、不協和音ばかりで面白くない、としている）
- ・オペラ：王立オペラ³⁾ で、サン＝サーンス《サムソンとデリラ》、ヴェルディ《椿姫》、ヴァーグナー《トリスタンとイゾルデ》・《ジークフリート》、ビゼー《カルメン》、レオ・ファル《離婚した女》
- ・学校関係のコンサート：ホッホシューレ⁴⁾、シャルヴェンカ音楽院⁵⁾、シュテルン Stern 音楽院⁶⁾ の学内コンサート
- ・ダルクローズ Emil Jaques-Dalcroze の講習会

2.2 演奏体験

幸田はこの時期、自らも演奏している。まず、個人レッスンを頻繁に受けている。ピアノをホッホシューレの教授のヒルシュベルク Ludwig Hirschberg に1から2週間に1回ほど、ヴァイオリン（ヴィ

オラや室内楽も)を同じくホッホシューレのマルケース Carl Markeesに週2回ほど、というハイ・ペースである。他に声楽をシャルヴェンカ音楽院のアンナ・ヴェルナー＝ホフマン Anna Wüllner-Hoffmannに週1回ほど習っている。ただし、自分に関しては練習した曲目や教え方の記録はいっさいない。このように自らの演奏スキルの向上に労力を傾注させていたことは、この時期の幸田が、帰国後も教壇に戻れる、と考えていた証左であろう。

また、合唱にも参加した。11月に、ベルリンの当時名門であるフィルハーモニー合唱団⁷⁾に入団し、12月20日にニキシュの指揮・ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏で、ベートーベンの第九交響曲に合唱団のメンバーとして参加、《第九》を歌った最初の日本人となった(推定)⁸⁾。他にもこの合唱団では、2回目のベルリン期も含め、ヴェルディの《スターバト・マーテル》やタウプマンの《ドイツ・ミサ》、レーガーの《百の詩編》、バッハ《マタイ受難曲》などを歌った。

ホッホシューレのオーケストラでも演奏したようであるし、随時、訪問先でヴァイオリンやヴィオラを担当し音楽家たちと合奏した。

2.3 交友関係

交友関係も多彩である。よく名前が出てくるのが、日本大使館関係者及び各夫人であるが、音楽関係者ではないので、省略する。

東京音楽学校の卒業生でベルリンに留学してきた山田耕筰(1886-1965 当時は「耕作」)の訪問を受けたのは、この時期であったはずである。幸田の日記で山田の名前が初めて登場するのは2回目のベルリン滞在期であるが、山田は1910年3月のホッホシューレの入試の前に幸田を訪問した様子を、半世紀近く経った1951年発行の『若き日の狂詩曲』に具体的に綴っているからである。幸田に、ホッホシューレでは作曲を学びたいという意思を伝えたところ、「先生はしばらく私を見てをられたが……立ち上がりざま、「作曲? むづかしいわねえ! 」ぽつんと言はれたまま、應接室を出て行つてしまった。その時ぐらゐ癪に障つたことはない」(後藤他編 2001: 925)というのである。

知日家のエロン夫人マティルデ Mathilde Ellon には日をあけず頻繁に会い、たいへんに世話になっている。こまめに面倒を見てくれるエロン夫人の存在がなければ、ベルリンでの生活はまったく違うものになっていたと思われるほどである。彼女とどのようにして知り合ったかは不明であるが、ベルリンに来てすぐに頻繁な往来が始まっていることから、渡欧以前からの知り合いであったようである。エロン夫人は音楽家ともつながりがあり、彼女の紹介で知り合った音楽家、特に女性音楽家は多い。

特筆すべきは、現地の音楽家との交流で、ホッホシューレ関係の教師たちの他にも、1909年11月14日にはエロンに連れていってもらって声楽家のローラ・ベート Lola Beeth と知り合い、23日には誕生会にも招待され、著名な女性音楽家の勢いがあるのに感心している。翌年3月3日ピアニスト・作曲家のマリー・ヴルム Mary Wurm と知り合い、5日に彼女の家でリオン Victoire de Lyon やマリー・ヴィーク Marie Wieck など、当時のベルリンで名の知れた女性音楽家たちに会っている。熱狂的な日本ファンのヴルムは、自作の《盲目のミユキさん》というオペラの一節を金蘭簿に記している。またホフマンに連れられて、日本を含む世界の民謡でリサイタルを開いたマリー・ベルク Marie Berg を訪問している。

2.4 同時代作曲家への興味

幸田は同時代の作曲家についてもたびたび記している。例えば1909年12月にはフランスの新楽派(ドビュッシーなどのことと考えられる)の話ホッホシューレのマルケースとしたり、翌年2月、2.1でも言及した「レーガーの夕べ」を鑑賞したりした。また当時注目されていたリヒャルト・シュトラ

ウスも頻繁に話題に上っている。

2.5 悲しい知らせ

ウィーンへ出発する直前の3月19日日記には奇妙な文が綴られた。「トラウリゲナリヒトの為終日トラウリヒ（悲しい知らせのため、1日中悲しかった）」（瀧井・平高 2012: 102）。これは何を意味するのだろうか。さらにウィーンからベルリンに戻ったとき、日本からの手紙で眠れなかった、とも記している。幸田は日本出発時休職扱いであり、前述したように、渡欧当初は、帰国後東京音楽学校に復帰できると思っていた節がある。しかし、校長の湯原には、最初からその気はなかったと推定される。これらの知らせや手紙は、瀧井（2012: 47）も推測するように、幸田の帰国後の進退について、悲観的な、あるいは決定的に絶望的な内容を知らせてきたものではないかと想像される。

3. ウィーン期（1910年3月24日-4月17日）

3.1 交友関係

ウィーン訪問では、短い期間に、日本でお世話になったディットリヒ Rudolf Dittrich（1861-1919）、15年前に卒業したウィーン音楽院⁹⁾の恩師ジンガー Friederike Singerやフックス Robert Fuchsなどに複数回訪問している。幸田は最初の留学については帰国後の談話以外記録を残していないが、そのころから知り合った人に記帳してもらうノートを作っており、記帳の日付で、いつごろの知り合いであるかが判明する。このノートを幸田は「金蘭簿」と名付けており、これも遺族が所蔵している。今回ウィーンで会ったデメリウス Magarete Demeliusや肖像・細密画家のbogdan Helene Bogdanなどの記帳はこの金蘭簿に最初の留学時代の日付で出ているので、かつての知人であることがわかる。

特筆すべきは、幸田がウィーンで会った女性音楽家の多くがウィーン女性音楽教師協会 Verein der Musiklehrerinnenのメンバーであることである¹⁰⁾。これは、ウィーン音楽院出身の女性音楽教育家が1886年創立した団体で、個人の職業音楽家たちに年金保険・健康保険・休暇保険などの社会保障制度を作り、男性並みの報酬も決めるなど、社会的に機能していた。メンバーによる音楽会も主催している。ジンガーやデメリウスはこのメンバーであった。ヨーロッパでは、女性音楽家の分野は最初ピアノ・声楽が主であったが、次第にヴァイオリン、のちに他の楽器へと可能性が広がっていった。例えば、今回デメリウスの紹介で訪問した女性チェリスト・ドナート Josefine Donatのような女性のチェリストは、当時のヨーロッパではまだ珍しい存在であったと考えられる。彼女もこの協会の会員である。

金蘭簿から、最初の留学時から上流階級とのつきあいがあったことがわかっているが、今回もクリングスポーア Kringspohr男爵夫人、ヴィヴェノート von Vivenot家（娘のアネッテと知り合っていたが、今回は不在）、かつて別荘を訪問したホルバイン・フォン・ホルバインスベルク Holbein von Holbeinsberg夫人と会っている。またこのとき、伏見宮若宮博恭夫妻がちょうどウィーンを訪問したため、滞在するホテルを訪ねている。

3.2 演奏会

ウィーンでも演奏会を訪れている。例えば宮廷礼拝堂のウィーン少年合唱団のコンサートでシューベルトのミサ曲、フーガー・ヴォルフ・コンサートでオール・ヴォルフ・プログラム、ブラームス《ドイツ・レクイエム》などを聴いている。

ウィーンならではのオペレッタや（レハールの《伯爵の子供》や《ジプシーの恋》、ヤーノ Jarno の《楽士の娘》）、オペラでは《リゴレット》や《トリスタンとイゾルデ》などを見ている。

また、ゾルダート＝レーガー Marie Soldat-Roeger（ウィーン女性音楽教師協会メンバー）率いる、女性だけのレーガー四重奏団も聞いた。

3.3 音楽教育事情の視察

この時期特筆すべきは、精力的に音楽学校のレッスンを聴講したことである。ウィーン音楽院校長ポップ Wilhelm Bopp に、いやな思いもしながら粘り強く交渉して、授業聴講の許可をもらい、ピアノのテルン Louis Tern（家に招待され、音楽談義もしている）やラインホルト Fugo Reinhold、ルートヴィヒ Ernst Ludwig、ヴァイオリンのプリル Karl Prill、ロゼ Arnold Rosé、ファイスト Gottfried Feist、声楽のシュレマー Irene Schlemmer-Ambros、ハベック Franz Haböck、パピーア＝パウムガルトナー Rosa Papier-Paumgartner（ウィーン女性音楽教師協会メンバー）のレッスンを聴講した。しかしついにはウィーン音楽院からは聴講を拒絶されて、ホラック Horak 音楽学校の授業を見学したりしている。

ウィーンで始まった音楽学校及び音楽のレッスンや授業の聴講は、この後のヨーロッパ滞在中、幸田の活動の中心となる。この聴講にはたいいていの場合細かい記録を残しており、当時の音楽学校で扱っていた曲やレッスンの具体的な状況が判明する貴重な資料となっている。

3.4 その他

ウィーンの音楽会や演奏家事情、シュトラウスやニーチェなどについての現地の音楽家との会話の内容が記されており、当時の音楽家が知的レベルの高い会話を楽しんでいたことがわかる。

また、ディットリヒの帰国後のウィーンでの栄光に囲まれた消息を知ることができるのも、興味深い。ディットリヒによれば¹¹⁾、彼が日本に招聘されたころ（1888年着任）、ウィーンで日本へ行くはずだった人（募集に応じた人という意味か）はピアノのルートヴィヒ以外にも少なくとも3、40人いたという。しかし皆、ヘルメスベルガー Josef Hellmesberger (Sr.) に、一つのことしかできないからと、断られたという。マチェロ・ロッシ Machello Rossi というかなり有名なヴァイオリニストも、ヘルメスベルガーに申し出て、ヴァイオリンしかできない、という理由で退けられたのに、数日後、「日本政府から招聘を受けたが、自分から断った」と新聞に話したというので、ヘルメスベルガーは非常に立腹したという。

印象に残るのは、中央墓地で音楽家の墓参りをした箇所、ベートーベンやシューベルトの墓をスケッチ入りで紹介している¹²⁾。幸田は、楽譜の断片はよく記しているが、絵を描いたのはこの箇所だけである。

4. 2回目のベルリン期（1910年4月17日-6月15日）

4月17日ベルリンに帰着した幸田は、前述したように（おそらく留守中届いていた）日本からの手紙を見て、寝られなくなる。以後日記のトーンが暗くなり、ついには具合が悪くなり医者にかかる（病名は不明）。日記はほとんどドイツ語でしたためられるようになる。

音楽生活も大きく性格を変える。まず、声楽をベート、ヴェルナーらに習う以外は、ふつつり個人レッスンを受けることをやめてしまう。一方で、知人の音楽家宅での室内楽を楽しんでいる。

大使館関係者ともあまりつきあわない。山田耕筰とは数回会っているが、ベルリンを離れるにあた

り片づけの手伝いを依頼したのかもしれない。山田は『若き日の狂詩曲』の中で、「ホホ・シュウレにはいれて、無我夢中で勉強してゐる私宛に、六月の六日だつたと思ふ一私の誕生日の少し前——一冊の詩集が届いた。それはエイドゥワルト・メリケの詩集である。扉には「君の誕生を祝して」と、ドイツ語でしるし「ノブコ・コダ」と横書きしてあつた」（後藤他編 2001: 92—93）と書いている。ただし幸田の日記では、この日ではなく、翌7日にピアノのことで来てもらった、としている（瀧井・平高 2012: 395）。遠山音楽財団付属図書館編（1984）によれば、山田にはメリケの詩に曲を付けた作品が4曲あり、すべて同一の本から詩を取っているが、それがこのとき幸田が贈った『詩集 ボーデン湖牧歌 Eduard Mörike. *Gedichte. Idylle vom Bodensee*』（Max Hesses Verlag、刊行年不詳 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館所蔵）である。この本の表紙見開きには、「明治四十三年六月九日 / 僕の誕生の祝として / 幸田信子（ママ）先生が / 伯林で是を下さつた / 忘れない為に書いて置く / 耕作」とある（前述した扉の文言はない）。山田は幸田がベルリンを発つときも、見送りにきた。

あれほど頻繁に訪れていた演奏会ももはや、モデルン Modern 音楽院¹³⁾ やシュテルン音楽院、ホッホシューレのシューマン祭り¹⁴⁾ のような学校関係のもの以外行かないようになる。

ただし、オペラにはまだ通っており、クロル劇場¹⁵⁾ で、ヴァーグナーの《タンホイザー》、《ローエングリン》、《マイスタージンガー》、《ニーベルングの指輪》シリーズ、《トリスタンとイゾルデ》、ヨハン・シュトラウスの《こうもり》、リヒャルト・シュトラウス《サロメ》、などを見ている。

自分の演奏や演奏会への興味が無くなる代わりに、この時期熱心になる分野がある。

一つはコンクールである。例えば、5月8日のイーバッハのピアノ・コンクールのチケットは、シュテルン音楽院長のホルンダー Gustav Hollaender のところにまで押し掛けてチケットを手に入れている。このコンクールについては細かい評を残していて、課題曲がシャルヴェンカの協奏曲だったことなどがわかる。

もう一つは、音楽学校や公立・私立学校の音楽の授業参観で、連日出かけては、教材や教え方を細かく記録している。ホッホシューレではピアノのバルト Heinrich Bart、モデルン音楽院やシュテルン音楽院などの私立音楽学校でヴァイオリンのホルンダー、ピアノのエンマ・コッホ Emma Koch、声楽のザイデマン Wladyslaw Seidemann らのレッスンを聴講しているし、ヴェルナーやコッホなどの教員の家でのレッスンまで参観している。

また、5月にホッホシューレのクレッチマー Hermann Kretzschmar にインタビューしたことは、非常に重要なできごとであつたらしく、質疑応答そのままの形で、詳細に記録している。幸田の関心は「シューレ Schule」にあったようで、ドイツ・フランス・イタリアの流派について多く質問し、クレッチマーの回答と自分の意見・感性が一致していることを確認した。

女性音楽家との交流は残っていたようである。ベルリンで知り合った女性音楽家の中でも、レーマンはやはり別格の存在であつたらしく、ベルリン出発直前の6月9日に訪問している。金蘭簿に「技術（原文では芸術 Kunst）の始めを見出した人は、終りを見出さず」（幸田（談）1912: 66）という言葉とともにサインをもらったのは、このときと推測される。この箴言を幸田は大切に、帰国後も引用している。またこの日グルーネヴァルトにおける最後のレッスンを受けたというのは、ベートの声楽のレッスンと思われる。幸田の遺品の中に6月の日付と「豊かな音楽に恵まれた幸田嬢に」というメッセージが記されたベートのポートレートが残っているからである。

5. パリ期 （1910年6月16日-7月10日）

6月15日パリへ向けて出発した日の日記は絶望的なトーンである。「Fini（終わり）」「es ist schon

mit mir hin (私はもう終わり)」(瀧井・平高 2012: 174-175) と立て続けに嘆いている。17日パリ到着、1か月弱滞在する。日記にはパリ滞在を不愉快だと記しているが、それにもかかわらず、ここでも非常に活動的である。

大使館の世話になることが多かったようだが、どのようなつてを頼ってか、直ちに現地のサロン¹⁶⁾に招かれ、出入りするようになる。特に女性歌手キナン Anita Kinen のサロンではエラル社社長 Albert Brondel と知り合い、以後の便宜を図ってもらえるようになる。

数回レッスンを受けたと書いてあるが、いったい何のレッスンかさえも記していない。おそらく声楽ではないかと思われる。

ここでも、主たる興味は二つ、レッスンや授業の参観と、コンクールである。

パリ音楽院¹⁷⁾のピアノや声楽のレッスンの聴講をして、細かい記録を残している。まずピアノのフィリップ Isidore Phillip (神戸絢子の先生であった)、彼から推薦状をもらって、声楽のイスナルドン Jacques Isnardon、グランジャン Louise Grandjean、ドウ・ラ・トゥール Georges de la Tour、ヴァイオリンのレミー Guillaume-Antoine Remy のレッスンを見学している。のちにオルガンのヴィドール Charles-Marie Widor にも知り合って、レッスンは聴講しなかったが、金蘭簿に記帳してもらっている。

また7月1日から4日にかけて、毎日幼稚園、高等小学校、女学校など視察している。1日に3校訪問した日もある。セヌ初等教育庁・学区視学官の許可の手紙が残っており、フランス語ができる人物の協力を得て、あらかじめ許可を申請していたことがわかる。ここでも細かくメモを取り、日記に記録している。

パリ音楽院では、卒業試験を公開でコンクールの形で実施していた。幸田は前述のブロンデルからチケットをもらい、6月29日から7月8日にかけてハープ、ピアノ、コントラバス、ヴィオラ、チェロの卒業試験を聴講し、日によっては一人一人細かく、課題曲の演奏と初見奏の評価を記録している。一等賞のみが卒業試験合格認定となるため、かなりの人数が一等賞を取ることを「Preisの安売」(瀧井・平高 2012: 214) とみなしている。

2回目のベルリン期と違い、パリでは演奏会への興味も復活した。6月26日5000人が収容できるトロカデロでのセザール・フランク祝祭演奏会は演奏だけでなく、会場の模様も記録しているが、レセプションの服装からクロークの様子、巨大なホールで聴衆が騒がしく、中には拍手の代わりに笛を吹く人もいて驚いたことまで、事細かに書いている。アマチュア合唱が集まる大規模なオルフェオン協会コンサートにまで出かけて、「dumme Concert (馬鹿げたコンサート)」(瀧井・平高 2012: 217) だったとしている。

ベルリオーズの《ファウストの劫罰》やマスネの《マノン》、ヴェルディの《アイダ》といったオペラも観賞した。特に《ファウストの劫罰》は印象に残ったようで、旋律を書きとめながら評している。

他にも、ゴシップを含めいろいろな人から聞いた当世の音楽事情を細かく書きとめている。

6. ロンドン期 (1910年7月10日-7月19日)

パリの後のロンドン訪問の目的の一つは、日英博覧会(5月14日から10月29日開催)にあった。ここで、博覧会のため軍楽隊を連れて訪英中の陸軍軍楽隊長・永井建子、鈴木バイオリンの製作者であり博覧会で賞を受けた鈴木政吉、東京音楽学校のお雇い外国人であったハイドリヒ Hermann Heydrich ら関係者に出会う。帰国後、博覧会の雰囲気や、日本楽器製造株式会社(談話では「ヤマハ」)も受賞したことを報告している(幸田(談) 1910: 56)。他にも、体調不良を訴えつつも、精力的に名

所観光や買い物をごこなしている。

オペラも欠かさず、メルバ Nellie Melba が出演したプッチーニの《ラ・ボエーム》、テトラツィーニ Luisa Tetrazzini やデスティン Emmy Destinn 出演のマイアベーア《ユグノー教徒》、オペレッタなどを見ている。常設のオペラがなく、興行主がシーズンごとに公演をうつイギリス方式を紹介している。

王立音楽大学¹⁸⁾を見学したが、授業は参観していない。

7月19日サウサンプトンへ移動し、20日日本へ向けて出航した。この日の日記には「何のために元気になるのか？ 何をしても意味がない。(中略) 自分の未来がどうなるのか、自分でもわからない。できるだけ早く十字架に向かって歩んでいきたい」(瀧井・平高 2012: 457) という絶望的な気持ちが綴られている。

日記は24日のアルジェリアで終わっている。

7. 日記からわかること

以上、日記などの資料によって判明した1年足らずの滞欧中の活動を、演奏評、音楽教育事情視察、女性ネットワークの諸点から考察する。

7.1 演奏評

日記や、遺族の元に残るプログラム・チケットの半券などから、滞欧中多くの演奏会に行ったことが判明している。またレッスンやコンクールの聴講でも同じだが、記録だけでなく批評が織り込まれることが多い。全体として、日記の後半になるほど記述が詳細になる傾向にあり、当時の演奏曲目や、演奏スタイルがよくわかる。

演奏評は総じて辛口で、オーケストラ付の合唱に、管楽器は終始音程が外れているし、合唱はひどいし、で、東京音楽学校の合唱の方がはるかに勝っている、などと辛辣であるが、好き嫌いの主観的な印象に終始することは少なく、客観的なものも多い。例えば、レーマンがヴァインガルトナー、リヒャルト・シュトラウス、ヴォルフを歌ったときは、音程が下がっているのは近代の曲からかもしれない、シューマンやシューベルトのような昔から得意だった曲だったらそういうことにはなるまい、と分析し、2か月後ブリュートナー・オーケストラとのベートーベンの夕べに出かけて、やはり昔の曲の方が格段によい、と自分の判断の正しさを確認したりしている。

このように、批評のしかたは演奏の内容に沿って具体的で、例えば四重奏団の演奏で、第1ヴァイオリンの音程が高すぎる点を、終始3度が大きい、というように表現している。

邦楽の用語を使って評することもあり、音程が低くなることを「める」、音がグリッサンドのように続けて演奏することを「こく」、その他にも「替手」などの言葉で説明している。

また数字譜や、音符を使って、音型そのものを記している箇所も多い。

このような音楽評から、幸田が、当時の日本人には異次元ともいえる程度の深い音楽性・的確な批判能力・過去や同時代音楽に対する豊富な知識と洞察力を持っていたことがうかがえる。これらの能力は、このヨーロッパ滞在によってより強まったことは想像に難くない。

7.2 音楽教育事情視察

ウィーン滞在のころから目立つのが、音楽学校から幼稚園、個人のレッスンに至るまでの、音楽教育現場の参観であり、教材や教え方などの記録も多い。渡欧当初は音楽学校に戻るつもりで、演奏家

としてのスキルアップのためレッスンを受けたり演奏会を観賞したりしていたが、ウィーンへ旅するころに「戻れる可能性はない」と通告されたため、帰国後教育中心に音楽に携わる方策を求めて、視察の方に熱心になったのかもしれない。

結局、帰国後、幸田が東京音楽学校に復帰することではなく、ヨーロッパの音楽や音楽教育をライブで体験して得た知識や批評能力は十全に生かされたとはいえない。しかし少なくとも、のちに「審声会」という民間の音楽教室を開き、プロを目指すわけではない、身分の高い（あるいは裕福な）家庭の女子を中心にピアノを教えるようになった際に、今回の経験は役に立ったのではないだろうか。

7.3 女性のネットワーク

ベルリンでもウィーンでも、幸田は数多くの女性音楽家と足しげく行き来をし、レッスンを受けたり、個人的に、あるいは集まりに招待されたりしている。

前述したように、ウィーンでは、ウィーン女性音楽教師協会なる団体があり、幸田は最初の滞在のころから、そのメンバーと交流があった。この団体についての日記内では言及はないが、おそらく存在は知っていたことであろう。当時は、女性の地位向上に向けての流れが始まっており、このような女性団体も次第に社会的に認知され機能しつつあった。他にも1回目のベルリン期にドイツ人女性に連れられて参加した、知的・芸術的レベルでの女性の交流を図るための「リュツェウムクラブ」のような団体の存在がある。

またかつてのウィーン留学のころから、幸田は身分や知的レベルの高い女性たちと交流を大切にしていた。今回の滞在でもパリで女性の主宰するサロンに招かれたことが、その後の活動につながったように、彼らの庇護・協力が滞在生活の充実を可能にしたわけである。逆にいうと、このような女性のネットワークともいえるべきものが当時ヨーロッパで機能しており、訪れる外国人女性をもその中に受け入れていたことがわかる。

おわりに

幸田は帰国後、ヨーロッパの音楽事情（印象に残る演奏家、演奏会の回数の多さや服装など、クラシック音楽が奨励され家庭にまで浸透している様子）を報告している（幸田（談）1910）。

1910年ごろベルリン、ウィーン、パリ、ロンドンの4大都市では、連日のように演奏会やオペラの上演があり、当代一流の音楽家たちが活躍していた。また、多くの音楽学校や、公立・市立学校で、充実した音楽教育が展開されていた。幸田の日記は、当時のヨーロッパの音楽事情を具体的に知る、貴重な資料である。

当時幸田は、そのような恵まれた環境の中で1年間、つらく不安な思いを抱えながら、きわめて勤勉に精力的に活動し、知識・経験・人脈を広げた。この日記は、彼女の豊富な音楽知識や深い音楽性、前向きの姿勢、確固たる批評眼などを知る上でも、大切な資料である。

残念ながら、幸田はヨーロッパで集めた音楽の種を、日本で植え満開に花咲かせることはできなかったといえよう。彼女の音楽家・音楽教育家としての図抜けたクオリティーを生かせなかったことは、日本の音楽界にとっては、残念なことであったといわざるを得ない。

今後は、この滞欧経験が、帰国後の幸田の人生にどのような形で展開されていくのかについても調べていきたい。

付表：幸田延滞欧期間年譜

西暦	明治	月	日	できごと
1909	42	9	25	幸田、横浜港出発。伏見若宮妃と同行
				ジェノバ着
		11	3	日記開始。ベルリン到着、ホテルベルビュー泊
		11	4	柏村の下宿へ
		11	8	エロン夫人初訪問
		11	14	ベート初訪問
		11	19	ホッホシューレ初訪問
		11	22	ヒルシュベルクの第1回目のピアノのレッスン
		11	23	ベートの誕生日に招かれる
		11	25 or 26	オックスのフィルハーモニー合唱団に入団。以後練習に参加
		11	25	マルケースの第1回目のバイオリンのレッスン
		12	20	ニキシュの指揮、ベルリン・フィルハーモニーで第九を歌う
1910	43	1	8	アンナ・ヴェルナー＝ホフマンを初訪問。彼女から声楽のレッスンを受け始める
		1	10	リュツェウムクラブ訪問
		1	12	マリー・ベルク初訪問
		1	14	リリー・レーマンを聞く
		2	1	伏見宮若宮夫妻ベルリン着。出迎えに行く。11日までアテンド
		2	20	ダンスの第1回目のレッスン
		3	1	ダルクローズの講習会聴講
		3	3	マリー・ヴルム初訪問
		3	19	「トラウリゲナリヒトの為終日トラウリヒ」
		3	24	ベルリン発、ウィーン着
		3	25	ディットリヒ訪問
		4	5	音楽院の授業聴講始める～11日まで（許可は10日まで）
		4	14	中央墓地の音楽家の墓を見学、私立ホラック音楽学校授業聴講（翌日も）
		4	16	フックス訪問
		4	17	ウィーン発、ベルリン着。「日本寄りの手紙を見 ねぶられず」
		4	19	伏見宮夫妻がベルリンに立ち寄ったため、アテンド。体調崩す
		5	8	イーバッハのピアノ・コンクールを聴講
		5	10	ホッホシューレで校長クレッチマーにインタビュー
		6	9	レーマン訪問
		6	15	ベルリン発 山田耕作が見送りに。「Fini...es ist schon mit mir hin」
		6	16	パリ着
		6	19	キナン夫人のサロンへ
		6	21	パリ音楽院にフィリップ初訪問。彼の紹介で音楽院のレッスン聴講始める
		6	26	トロカデロのセザール・フランク祝祭演奏会

	6	29	パリ音楽院の卒業試験聴講～7/8
	7	1	許可を得て、いくつかの学校の音楽の授業視察始める～7/4
	7	3	ヴェルサイユ宮殿見学
	7	7	オルフェオン協会コンサート（アマチュア合唱）
	7	10	パリ発ロンドン着
	7	12	日英博覧会。永井建子、ハイドリヒに会う。
	7	18	王立音楽大学見学
	7	19	ロンドン発サウサンプトン着
	7	20	サウサンプトン出航。「Möchte möglichst bald zu einem Kreutz wandeln」
	7	24	アルジェリア出航。日記終了
	9	2	帰朝

注

- 1) この留学については、以下を参照されたい。

平高典子「幸田延のウィーン留学」『論叢 玉川大学文学部紀要』 第53号 2013年、101-121頁

平高典子「幸田延のボストン留学」『論叢 玉川大学文学部紀要』 第54号 2014年、191-211頁

- 2) 音楽取調掛から東京芸術大学に至る組織の変遷は以下の通り。

1879（明治12）年 音楽取調掛

1885（明治18）年 音楽取調所

1885（明治18）年 音楽取調掛

1887（明治20）年 東京音楽学校

1893（明治26）年 高等師範学校附属音楽学校

1899（明治32）年 東京音楽学校

1949（昭和24）年 東京芸術大学

- 3) Lindenoper。現在のベルリン国立歌劇場 Staatsoper Unter den Linden。18世紀に開場した。当時は王立歌劇場 Königliches Opernhaus と称し、リヒャルト・シュトラウスがオーケストラ（王立宮廷楽団）を指揮していた。

- 4) 1909年から1910年は Mit der Königlichen Akademie der Künste zu Berlin verbundene Hochschule für Musik、1910年から1911年は Königliche Akademische Hochschule für Musik zu Berlin と称した。以下「ホッホシューレ」とする。

- 5) das Conservatorium der Musik Klindworth Scharwenka クサーヴァー・シャルヴェンカが校長を務めるベルリンの私立音楽院。

- 6) das Sternsche Conservatorium der Musik シュテルン Julius Stern が1950年創立した、ベルリンで一番古い私立音楽学校。

- 7) 合唱指導者ジークフリート・オックス Siegfried Ochs（1858-1929）がディレクターを務める、アマチュアの合唱団。当時ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とよく共演していた。

- 8) 幸田成貴氏所蔵の幸田延の遺品には、この演奏会の合唱団員用のチケットと推定される券が残っている。

- 9) 幸田が最初の留学で学んだ私立のウィーン楽友協会音楽院は、1909年国立の Kaiserlich-königliche Akademie für Musik und darstellende Kunst（オーストリア＝ハンガリー二重帝国のウィーン音楽アカデ

- ミー)に改組された。以下両者ともに「ウィーン音楽院」と呼ぶ。
- 10) この団体についての記述はHauer (1998)による。同書のメンバーリストに掲載されていた場合、メンバーと判断した。
- 11) 以下の話は、1910年4月11日の日記に登場する(現代語訳は、瀧井・平高 2012: 339)。
- 12) 原画のコピーが、瀧井・平高 2012: 130-131に掲載されている(文言は解説されたものに置き換えられている)。
- 13) Moderns Conservatorium der Musik モーデルンMax Modernが校長を務めるベルリンの私立音楽院。
- 14) 日記原文では「Vortragsabend in der Hochschule (Schumannfeier)」(瀧井・平高 2012: 163)とあり、講演を伴った演奏会で、主にシューマンの曲が演奏された。
- 15) Krolloper。クロルJoseph Krollが1844に開いた娯楽社交場にあり、当時は新王立オペラ劇場Neues Königliches Operntheaterと称し、オペラ、コンサートバレーなどが上演されていた。
- 16) フランスのサロンは、もともと上流階級の夫人たちが主宰する芸術的な集まりや若い男女のダンスの会であり、第三共和政の時代の当時、知的階級に属する人たちが主宰するサロンもあった。
- 17) 1795年設立、当時は「音楽・演劇学校」(Conservatoire de musique et de déclamation)と称した。現在のパリ国立高等音楽・舞踊学校(Conservatoire national supérieur de musique et de danse de Paris)。
- 18) Royal College of Music (RCM) だと思われる。国立音楽養成学校の後継校として、1887年に設立された。

参考文献 (事典の類は省略した)

【1次史料・公文書類など】

ウィーン国立音楽大学 Universität für Musik und darstellende Kunst Wien 資料室所蔵職員録
ウィーン州立市立公文書館 Wiener Stadt-und Landesarchiv 所蔵経歴コレクション Biographische Sammlung
ウィーン楽友協会 Gesellschaft der Musikfreunde 所蔵個人ファイル
幸田成貴氏所蔵幸田延遺品 (一部明治学院大学付属日本近代音楽館にマイクロフィルムで所蔵)
滞欧日記、金蘭簿、写真、演奏会プログラム、演奏会チケット、メモ、手紙など
パリ国立古文書館 Archives nationales 所蔵パリ音楽院卒業試験1910年議事録
ベルリン・フィルハーモニー合唱団 Philharmonischer Chor Berlin 所蔵プログラム
ベルリン州立公文書館 Landesarchiv Berlin 所蔵劇場関係プログラム

【書籍・記事・論文など】

Hauer, Georg. *Club der Wiener Musikerinnen - Geschichte und Kulturpolitische Bedeutung der Vereinigung von ihrer Gründung 1886 bis zur Gegenwart*. Dissertation, Universität Wien, 1998

Hondré, Emmanuel. Liste des professeurs du Conservatoire des origines à nos jours. IN: Emmanuel Hondré ed. *Le Conservatoire de musique de Paris: regards sur une institution et son histoire*. Association du bureau des étudiants du CNSMDP, 1995

Muck, Peter. *Einhundert Jahre Berliner Philharmonisches Orchester: Darstellung in Dokumenten I-III*. Hans Schneider, 1982

Stern, Richard. *Was muss der Musikstudierende von Berlin wissen?* (1909年版). Dr. Richard Stern Musikverlag, 1909

Stern, Richard. *Was muss der Musikstudierende von Berlin wissen?* (1914年版). Dr. Richard Stern Musikverlag, 1914

Taubert, Ernst Eduard. *Festschrift zum sechzigjährigen Bestehen des Stern'schen Konservatoriums der Musik in Berlin*. 1910

Tittel, Ernst. *Die Wiener Musikhochschule: Vom Konservatorium der Gesellschaft der Musikfreunde zur staatlichen Akademie für Musik und darstellende Kunst*. Elizabeth Lafite, 1967

von Vivenot, Annette. *Geschichte der Familie von Vivenot*. Steyrermühl, 1902

朝日新聞記者編『欧米遊覧記』、朝日新聞、1910年

井上さつき「フランス音楽夜話 5 サロンと音楽」『ふらんす』2011年8月号、白水社、2011年

幸田延（談）「欧楽界の盛況」・「家庭と音楽」『音楽界』3巻10号、1910年、56-59頁

幸田延（談）「音楽と家庭」『音楽界』5巻2号、1912年、65-66頁

後藤暢子『山田耕筰 作るのではなく生む』、ミネルヴァ書房、2014年

後藤暢子他編『山田耕筰著作全集3』、岩波書店、2001年

菅原透『ベルリン三大歌劇場 激動の公演史【1900-1945】』、アルファベータ、2005年

瀧井敬子・平高典子『幸田延の『滞欧日記』』、東京藝術大学出版部、2012年

瀧井敬子「幸田延の『滞欧日記』を読むために」 瀧井敬子・平高典子『幸田延の『滞欧日記』』、東京藝術大学出版部、2012年、1-68頁

東京芸術大学百年史編集委員会『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇第1巻、音楽之友社、1987年

東京芸術大学百年史編集委員会『東京芸術大学百年史』演奏会篇第1巻、音楽之友社、1990年

東京芸術大学百年史編集委員会・芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇第2巻、音楽之友社、2003年

遠山音楽財団付属図書館編『山田耕筰作品資料目録』、遠山音楽財団付属図書館、1984年

日本近代洋楽史研究会『明治期日本人と音楽』、国立音楽大学附属図書館/大空社、1995年

明治ニュース事典編纂委員会・毎日コミュニケーションズ出版部『明治ニュース事典』第8巻、毎日コミュニケーションズ、1986年

【定期刊行物】

Allgemeine Musikzeitung

Bericht über das Conservatorium für Musik und darstellende Kunst (1888-1893), Statistischer Bericht über das Conservatorium für Musik und darstellende Kunst (1893-1895), Jahresbericht der K. K. Akademie für Musik und darstellende Kunst (1908-1910) 「ウィーン音楽院年報」

Jahres-Bericht über die mit der Königlichen Akademie der Künste zu Berlin verbundene Hochschule für Musik (1899-1910) 「ホッホシューレ年報」

Neues Wiener Tagesblatt

Österreichische Musik- und Theaterzeitung

Philharmonischer Chor- Bericht über die Vereinsjahre 1907-1910

Signale für die musikalische Welt

Vossische Zeitung

Wiener Allgemeine Zeitung

【参考サイト】

Bibliothèque nationale de France, catalogue général. <http://catalogue.bnf.fr/index.do>

Berliner Adressbücher 「ベルリン住民帳」 Zentral- und Landesbibliothek Berlin <http://digital.zlb.de/viewer/>

cms/82/

Friedhöfe Wien <http://www.friedhofewien.at/eportal2>

Musik und Gender im Internet <http://mugi.hfmt-hamburg.de/>

Lehmann's Allgemeiner Wohnungs-Anzeiger 「ウィーン住民帳」 Wienbibliothek Digital <http://www.digital.wienbibliothek.at/periodical/titleinfo/5311>

Le Ménestrel. Bibliothèque nationale de France [http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/cb344939836/date.r =
ponselle.langFR](http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/cb344939836/date.r=ponselle.langFR)

農商務省日英博覧会事務局 『日英博覧会授賞人名録』、1910年、国立国会図書館近代デジタルライブラリー
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/780079>